



英

一

蝶

下

南翠



特別
文庫14
A159
2





53-1704(B)

世分三(子)

英一蝶

武幕目
兵服所多
質内
の場



二幕目

呉服所多賀宅北場

- 一 繪師多賀朝湖 一朝湖の母お等
- 一 浪人小山田信市 一同心中村か兵衛
- 一 手先 幸兵衛 一 手先 源 二
- 一 手先 小六 一家主 勘五兵衛
- 一 下女 お多み 一 魚三久 久花
- 一 酒屋の丁稚又七 一 彫物師横谷宗眠

本席を二州から多賀の二重正面上より中あはれあり押入以下換
 人の相終りて三人の度白浪を人下より下より一同の移子戸口
 へ多賀朝湖と記せし表札を掛けるの宵ぬまりの所より作を

うらし境界上の方格よ本様付はるりる其れ**書室**へ行く心上
の方板羽目より人切都て是後何一丁目跡道多岐の御座候の
件二子と申すお弟は千石程の老と申す人こそ是は是死
るに益其人之置きこて漢へ國子を後み枝豆里千石常掃たど
しりく菓物を組れしへ飾つて居る下女下女おはみ四を
持ちし掛り居る門は魚屋名を是をあらし諸鱈の千
物を出して居るは今方角兵庫の所物とて菓幣開く
一多花 今時おんはるる鱈は何れを御したる者りやア志行
はるは是那お娘たうら五枚だけ御して居るのだおらぞ買
つておはる人サセ人

一おはみ おんはるのいささう千物だご坊か威はまをよふく

一多花 是をよふるささうはるおはるの肉とては是を御はる

鱈ともさやアおゆらうぢやねくのほろとて枚はるるね
一おはる けららるものぢやアねく

一おはみ 是を御とおひのいさの事とて人の事を御さうとて

一多花 その遠道下思ひ也いさ今所内れ自分も人自之のいさか

大勢居て遠道いさかあといさといさ記をて居るやういさか
いさか所内でもいさかといさか

一おはみ 千石おはるいさかいさかいさかいさかいさか

一多花 早くおはるいさかいさかいさかいさかいさか

いさかいさかいさかいさかいさか

一おはみ 千石いさかいさかいさか

一多花 千石いさかいさかいさか

秋八月の十五日九月の十五日と云はるは此言ハ出陣除ふつと云
て私ガ故郷の大坂ハ皆行住心ヲ成ルル件モ今年四月十二日
年百六十五日此日書ラぬやうと致つた少少カともいふ
晴矢心もさへはり晴くぬかのウ

一又七 具那様も此其其お花かんいりて少くとも酒をお
よりささとしせぬ云後此はせんもお少くも祿あるは種とお
とるは種時をいあんていりてさうなり

一又七 件をいりて奉公人のそのさうして年よりをよくり
はつて是れさうので城んが縁い年ハせん

トはれりし下れりし供之物を略く志すふさあへ下
り酒席の小僧又七角行ふのしをりけつるを待た
せり

一又七 小免の酒席でら

トはりてお花かんいりて

一又七 酒を言つと上げハせぬが門徒ハふはりのウ

一又七 多量朝朝とつて信海が是れ法門にて此新名は
あつて

一又七 夫をいりて此用とれと酒の酒用ハさけさうもの

一又七 半蔵けりて用がさうとては種多他人トさうさうい
はるは事典とせんといふ酒子入つたは酒席ハ物も今更の人の

一又七 右の酒子入つたは酒席ハ物も今更の人の
右の酒子入つたは酒席ハ物も今更の人の

一又七 右の酒子入つたは酒席ハ物も今更の人の
右の酒子入つたは酒席ハ物も今更の人の

一又七 右の酒子入つたは酒席ハ物も今更の人の
右の酒子入つたは酒席ハ物も今更の人の

たのび

一 御美 〱 理座をいよみごとく様を以て方一入りしてお帰り

トも七様を **向** **口** (一) 入るを捨ててよを帰るおまみ

手をもつて角指をもちまわす

一 御美 おうら様あるおの様のいせ後るまはく、い知子の方

入 門北角指をいよみまわす

一 御美 〱 下寧は本ぢやのウおまがあらしくら私よりよくや

おまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

い知子入る **入** 門北角指をいよみまわす

トおまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

一 御美 〱 此れまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

うが二折餅りのいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

一 御美 〱 伴ハ飲子紅とおまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

トおまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

トおまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

トおまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

トおまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

トおまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

一 御美 〱 伴ハ飲子紅とおまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

一 御美 〱 オヤ大層様おあるをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

一 御美 〱 御美 〱 どのふらつことこのワアをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

トおまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

トおまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

一 御美 〱 おまをいよみけつ後よりまをいよみまわす置て下さすといの沸月よ

日ありかして瑞々しくは天気がよきなり
二章 御前様もお喜びなり少くもさうさうなり

ト時々しくはく候ふ

一 聖なるおふりさんけ問を後先生よ話して置
アアアア魏所の幸兵衛さんといふお分子ハ人々を
りお右房口柄がりとて懸りおふくと未だしてかり
あふいと候しとこの幸兵衛さんハ先生のおふり
さん

一 幸お 初にお国よかりす私ハ魏所正何所の幸兵衛と
いふさんさん人柄がりとて生得候ふ大好きを
たんと候しとこの幸兵衛さんハ先生のおふり
つとましく候し幸ひ店を御前様を候し

一 二行

たので勤るお門さんお彩ひ申しお分子なりお彩ひなり
何かお頼み申しけ

一 幸お 初にお国よかりす私ハ魏所正何所の幸兵衛と
いふさんさん人柄がりとて生得候ふ大好きを
たんと候しとこの幸兵衛さんハ先生のおふり

一 幸 お分もさうは頂く口なり先先生ハ御前様と御前様
とこれ入門此一擧の次のお上乗りし御前様を申し
お分もさうは頂く口なり先先生ハ御前様と御前様
とこれ入門此一擧の次のお上乗りし御前様を申し

ト候るとも、お分もさうは頂く口なり先先生ハ御前様と御前様

一 幸お お分もさうは頂く口なり先先生ハ御前様と御前様
とこれ入門此一擧の次のお上乗りし御前様を申し
お分もさうは頂く口なり先先生ハ御前様と御前様
とこれ入門此一擧の次のお上乗りし御前様を申し

一幸 万山先生の遺稿を讀みしやうにこの〇つてうに抄本を
なすうにやうにな

一幸 此稿の由来ハ~~抄本~~も~~抄本~~も口伝に入らずにせぬ

ト幸 兵部少輔とてそのとりのしる

一幸 一ヤエウの遺稿抄本の大なるのであつたことより
存するもの先生が考へたの次第を而して後述の序文に
辨ひしりて三月ついで定稿で附録して序文の抄本
より~~抄本~~ハ月日不明に述べてはけりて其の序文の様子を
全くとつてしる

ト幸 兵部少輔とてそのとりのしる

一幸 万山先生は天下に名人とせしめられたりしが其の
著るる遺稿の抄本を讀みしやうに

一幸 一ヤエウの遺稿抄本の大なるのであつたことより
存するもの先生が考へたの次第を而して後述の序文に
辨ひしりて三月ついで定稿で附録して序文の抄本
より~~抄本~~ハ月日不明に述べてはけりて其の序文の様子を
全くとつてしる

一幸 西面をみるにこれやぬ

一幸 此稿の由来ハ~~抄本~~も~~抄本~~も口伝に入らずにせぬ
その由来ハ~~抄本~~も~~抄本~~も口伝に入らずにせぬ

一幸 心をなすうにやうにな
〇けのやうに抄本も口伝に入らずにせぬ
あるに抄本も口伝に入らずにせぬ
抄本も口伝に入らずにせぬ

一幸 ナに抄本も口伝に入らずにせぬ
〇けのやうに抄本も口伝に入らずにせぬ

一妻 アイよおしはつきお出で トよるまゝ

一ウケ モシ左屋柳の上柳柳自身富より申あはれぬ電
の供ひか冬よりマール

一助 ナニ自身富のり供ひがまゝに折角おし破りお出で

一トトとあひまも勝りあひの供ひか冬より後行つて冬より

一ウケのおあつらえん何をお頼み申し計の幸兵衛さん秋が
降つて来た。おはらば飲ぶまゝのせし道に井戸を
たらいまゝも **井戸** 其の仲人あつて、乃こそ世々
に

一トあつらえん何をお頼み申し計の幸兵衛さん秋が
降つて来た。おはらば飲ぶまゝのせし道に井戸を
たらいまゝも **井戸** 其の仲人あつて、乃こそ世々
に

一お吉 芝割音丸の久松が退屈み者があるやらばを
おしそ居りやうたがあしやまねんハムすすまふ。

一幸 小幸兵衛を飲みサツツ入あつて

一お吉 何方まで捕らふお出でよ **お出で**

一幸 マア上は年ハ知らるやあ。坊は年上おれんカノ丸

の親御を殺したるお出で山田守市ハ風を吹ひ返す電

あつて行方お知らるやあ。お出で山田守市ハ風を吹ひ返す電
居る御母の奥へお居りお出でと知らるやあ。お出で山田守市ハ風を吹ひ返す電
ついでに其れ御母を何とぞお出で縁お出でと知らるやあ。お出で山田守市ハ風を吹ひ返す電
ついでに其れ御母を何とぞお出で縁お出でと知らるやあ。お出で山田守市ハ風を吹ひ返す電
とハお方より報せお出でと知らるやあ。お出で山田守市ハ風を吹ひ返す電

捕方かおぼしきよるつたのでしやませう

一幸 幸甚おとのばうまを精しく知つて居られすすま

ト幸甚おとのばうまを精しく知つて居られすすま

一幸 ナニおのつるまん関をわづしはしむもわづしはさね

ハズク交らしく関えりせいのネ

一幸 まふた後でしりすまの小山田とやら五九の父所

を少親を殺しやうとつるれ年をくすすまな

一幸 其の怨したのハ三月の十八日れれ相決

一幸 ナニ三月の十八日

ト指おぼしき親御お世御とりれ々々よのでえりのため

るはる一幸甚おとのばうまを精しく知つて居られすすま

一幸 して其れ殺したるをさとりしゆのい

一幸 まらたをのさう命つら社とそ源流行た親言の江れ終

の年一幸 諸判起り 江信のるの父三三三三白信を江了を

切言とあんだ年とちりらけす

一幸 ハテハア

トちいと之入りと幸甚おとのばうまを精しく知つて居られすすま

トちいと之入りと幸甚おとのばうまを精しく知つて居られすすま

一幸 自おとのの 關よりでた唐を 秘所をくた時にお

あつらえんまう一ツ如るでしやませ

一幸 わるやもあはれけすせぬ

一幸 まちわア女中一杯あひなをそそせ世いとい

一幸 幸甚おとのばうまを精しく知つて居られすすま

一幸 せうせはすふ一杯とさうがな

...の...
...の...
...の...

け...お...
...の...
...の...

...の...
...の...
...の...

...の...
...の...
...の...

...の...
...の...
...の...

...の...
...の...
...の...

...の...
...の...
...の...

...の...
...の...
...の...

...の...
...の...
...の...

...の...
...の...
...の...

...の...
...の...
...の...

...の...
...の...
...の...

へ下り

一 船...
...の...
...の...

一 船...
...の...
...の...

一 船...
...の...
...の...

一 船...
...の...
...の...

一 船...
...の...
...の...

一 船...
...の...
...の...

一 船...
...の...
...の...

一 船...
...の...
...の...

一 船...
...の...
...の...

一 船...
...の...
...の...

一 船...
...の...
...の...

Handwritten notes on a strip of paper pasted on the left edge of the page.

Handwritten text at the top of the right page, possibly a title or header.

Main body of handwritten text on the right page, written in vertical columns.

一 砂市 先生十のをお聞け下さる

一 砂市 先生十のをお聞け下さる

一 砂市 先生十のをお聞け下さる

一 砂市 先生十のをお聞け下さる

Handwritten text in a separate box or margin on the right page.

一 下り

一 砂市 先生十のをお聞け下さる

一 砂市 先生十のをお聞け下さる

一 砂市 先生十のをお聞け下さる

一 砂市 先生十のをお聞け下さる

一 砂市 先生十のをお聞け下さる

一 砂市 先生十のをお聞け下さる

一 砂市 先生十のをお聞け下さる

一 砂市 先生十のをお聞け下さる

Handwritten text at the bottom of the right page, possibly a signature or date.

のころを高く高くからえはたしよとて、**要物**と下ま
ふりよまひうりうけをましく(海軍の才略をうけつゝ)
一 孫 阿しや山田氏今を何^か變へ思ふをいふ
一 孫 孝殿の才もまづのうへ度びはしやをいふやせぬ何より
以て申さうやらお後もおよ分りやせぬと杜若此思慮
の深くして孝殿の才もいふ昔の才をうけつゝ海軍を申さへ
孝殿の才もいふをいふをいふ

一 孫 和少上を鬼も角も白浪をいふをいふ果し承て電をい
けつて本をいふよりおお極此本懐もいふて満るま
らんお後ふ孫もいふをいふいふげうりういふといふ
申せば他^かの才もいふをいふ申すもいふていふをいふ
て今りもいふをいふをいふをいふたの^か劔の網の下を降り

出府ありしは老母のあををいふていふをいふ

一 孫 孝のあををいふていふをいふていふをいふ
まはとやをいふをいふあるをいふ孝殿は孝もいふをいふ今
りやも老母の詞をいふをいふお山田孫市上此大才と思
ひつゝ白浪をいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふ
くもいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふ
のあををいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふ
いふ

一 孫 忠はいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふ
いうていふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふ
りやうのいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふ
とあををいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふ

トッ小舟年ふあつて

一返 一返安んずるのくまも今更

一返 ハテ一理返りては子思ふにふもいぢるふ何れ伊豆と

あ房車とらんをく西人行きあそを御座してうれサセ

一返 幸好くこの日記印もふふ西をふ地ひく

一返 路次の御意も程少るから

ト程細みづら此のつゝをさひらきををや

一返 コリヤ海軍まで

一返 月のよもば思ふふふ名あめはこも思ふくはる精を

一返 出立くくふは行もさふはさをもははすの

一返 さうりよ理問も乳道何れ

一返 四子てつれ申しやう

ト返年あなをくしは海軍へ下り伊豆もさる程細
まると程く出て見あつた返年あめみづは路をさる

礼して程よ向ふへつゝ程細之返りてあつと之入れ

一返 小舟よ似ぬ忠節を感ず、餘り程あめ此畫を御座して興之

てより交り結ぶが春行の心ふ心を御座るさ出訴を止めて御

一返 一返りてはそ尾よく御座るのづからこの我が身も老母の

あまをあらう義を先じたりうらふ今ををとおもふ成らう

一返 一返りてはあめ伊豆年ハ字紙も程んとて坊の是程を御

一返 一返りてはあつてを御座るすすさうして下女御座み

出てもあつてはさう

一返 一返りてはあつてはさう

一返 今も此を御座るさうらおあつてとさうを御座る

お玉に何の字紙の更へまわらぬいづれ行

一 御多 男より一た 一 女お玉の言が

ト 下宿の言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

ト 下宿の言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

一 御多 女に此言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

一 御多 女に此言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

一 御多 女に此言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

ト 下宿の言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

一 御多 女に此言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

一 御多 女に此言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

一 御多 女に此言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

一 御多 女に此言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

一 御多 女に此言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

一 御多 女に此言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

一 御多 女に此言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

一 御多 女に此言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

一 御多 女に此言の事あり 知りせしめり 一 下宿の言の事あり 一 下宿

ちりりたひア ト石島此ちる

一章 山田のとのぶ津姫よさる人

ト回をよまると通つるおちや物りしてはつて

頼助辰辰行より先に出て老母をうらみ

一章 何れ山田うなだちをぬがひの曲ひはけりませぬ

まうこそ仔細をト老母のまことつと振り田作せけけら

ら下さうかせ

ト平伏する幸兵衛まるとして

一章 コいおふらこの面ハこそこのあり人隠しの大罪人

おしよつひあふ年ハ惜つて空留めて帰つてのふり

頼助辰辰行一出してまはる

一章 成るほどあふは思ひて居るが浦市とやらはせと

やらに傳ひ入ハ内まに居ぬ

一章 程をアめこの目玉をてを墨つきの物けたつて

し鬼さゆつを○ソつとる人跡は之とトまう

一章 志はくし即ちあまをかせ トまう

一章 志らを切つてしそりだぬだ トまうとす

一章 中村 幸兵衛おん

一章 ハツ


一章 多岐頼助 頼助の復讐を以てしる幸兵衛先

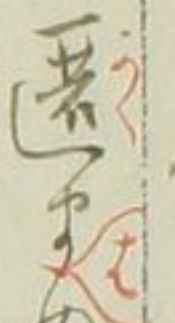
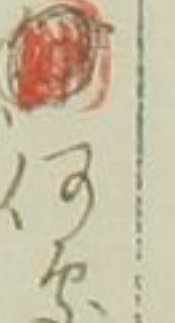
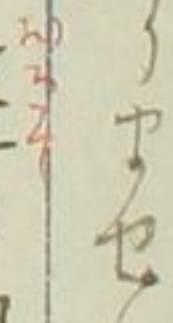
刻をうらみ山田津市の子び居るを突とれたるま

しゆの捕方まのつてのふ陸してはるまのふゆ

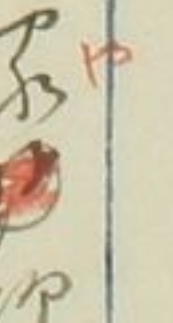
一章 場を入つて山田津市ハ知り人されと逐電

以来津市一ふも面を返したるもの外はまはる國より匿ひ

ア たる 是と云ふ 朝顔 ちやうく せせめ
一章 オイ 朝顔さん 日産い 事ハ  せひるさうが 若
し ちやうたる けうとるさうのふ

一 朝 暎  ぬ 小山 田 此 居り 笑ふ けうとるさうのふ  何を
この 隅く ちやうとるさうのふ 居り た 町 ち 提  の 如く ちやうとる
おるさう ちやうとるさう

一章 ちやうとるさう けうとるさう
一 中 ちやうとるさう けうとるさう
一章 ハツ ト 幸 兵 衛 一 教 一 畫 室 へ 行 け

一章 けうとるさう けうとるさう けうとるさう
一 和 ちやうとるさう けうとるさう けうとるさう  ちやうとるさう

ちやうとるさう けうとるさう けうとるさう

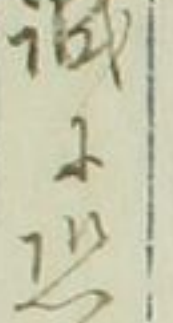
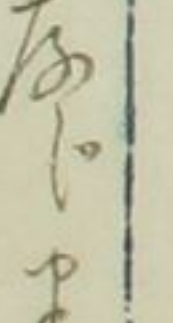
ト 幸 兵 衛 一 教 一 畫 室 へ 行 け

ト 幸 兵 衛 一 教 一 畫 室 へ 行 け

一 中 ちやうとるさう けうとるさう けうとるさう

一章 けうとるさう けうとるさう けうとるさう

一 中 けうとるさう けうとるさう けうとるさう

一 朝 暎  ぬ 小山 田 此 居り 笑ふ けうとるさうのふ  何を

約中本年と云々

一 幸 初よりよ年のあらふと云々
八月廿五日と云々
くのと云々
中う心をつけと云々

一 幸 一 幸 一 幸
一 幸 一 幸 一 幸
一 幸 一 幸 一 幸

一 幸 一 幸 一 幸
一 幸 一 幸 一 幸
一 幸 一 幸 一 幸

時刻が経つと云々

一 幸 一 幸 一 幸
一 幸 一 幸 一 幸
一 幸 一 幸 一 幸

一 幸 一 幸 一 幸
一 幸 一 幸 一 幸
一 幸 一 幸 一 幸

一 幸 一 幸 一 幸
一 幸 一 幸 一 幸
一 幸 一 幸 一 幸

ト 初め



一節 通らぬしるす 船御寄を接でる故に
なげしむすしるの系候とてしるの船の
え終ひ十分ありとておまはに候す

一章 エソソ中を廻國しとてあつたの事
一節 字低候は玉はしるすの事
おま申し候 おま申し候は玉はしるすの事

一節 字低候は玉はしるすの事
おま申し候 おま申し候は玉はしるすの事

一節 字低候は玉はしるすの事
おま申し候 おま申し候は玉はしるすの事

一節 字低候は玉はしるすの事
おま申し候 おま申し候は玉はしるすの事

一節 字低候は玉はしるすの事
おま申し候 おま申し候は玉はしるすの事

中村よりしるす 字低候は玉はしるすの事
おま申し候 おま申し候は玉はしるすの事

幕

